

早稲田大学 オープンカレッジ 2022年05月21日

日本とアジアをつなぐ風景：棚田

【寄藤 昂】

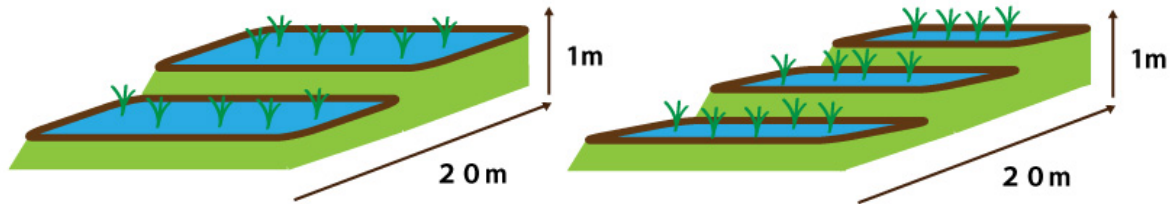
1. はじめに

1.1 棚田とは

棚田とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田である。日本では、山がちのところではどこにでもみられる水田形態で、日本にある約250万haの水田のうち約22万ha(8%)が棚田だといわれている。

一枚一枚の面積が小さく、傾斜地で労力がかかるため、中山間地域の過疎・高齢化にともなって、1970年代頃から減反政策の対象として耕作放棄され始め、今では40%以上の棚田が消えているといわれる。

棚田に関して、日本では農水省が便宜的に定めた「傾斜1/20以上」という区分があり、中島峰広早稲田大学名誉教授（NPO法人棚田ネットワーク代表）がそれを用いて「全国棚田分布図」を制作したこともあって一般化しているが、世界的には明確な定義は存在しない。



棚田の機能は「多面的」であり、本来的な機能として「食糧生産」「保水」「洪水調整」「国土保全」「生態系保全」があげられるが、近年では「観光資源」としての評価も高まっている。

日本国内の棚田は極端に面積が少ない埼玉・東京・沖縄を除いて全国に存在する。その中で卓越する地域は、新潟県の頸城丘陵、岡山県の吉備高原、大分県の阿蘇・九重火山山麓といったところで、西南日本（富山―岐阜―愛知以西）に約2／3が集中している。

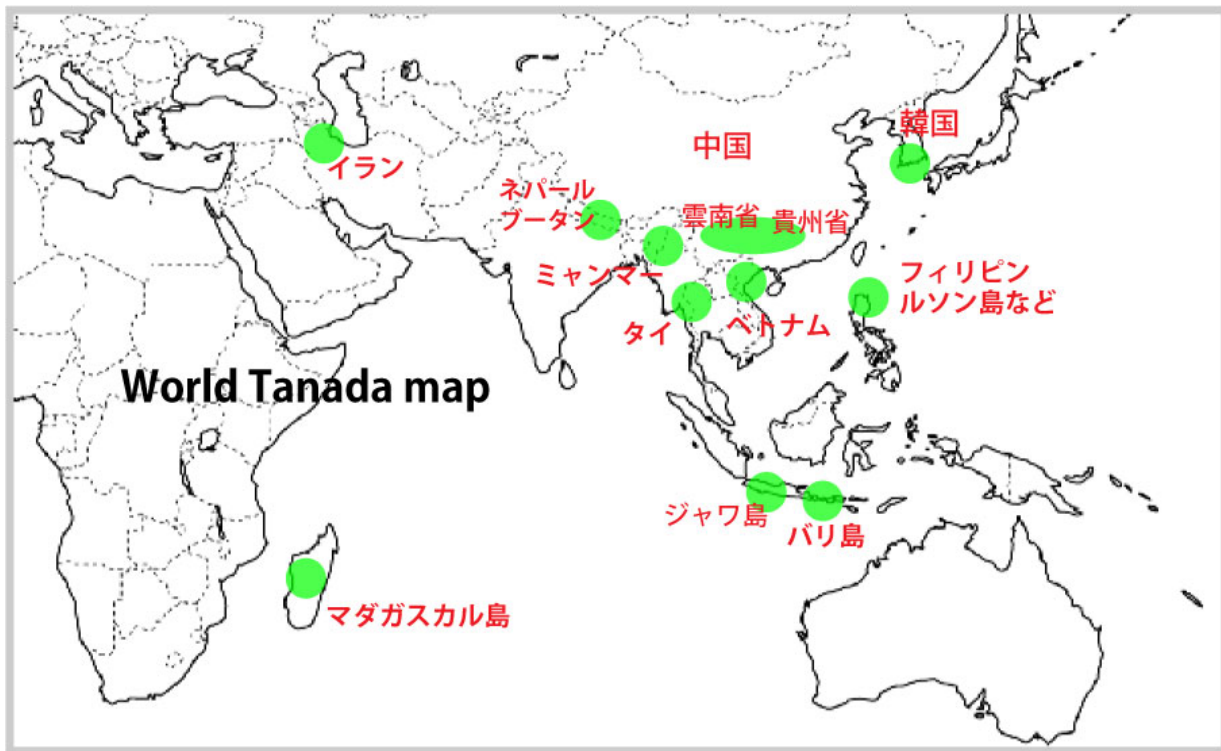


棚田が卓越する地域

1.2 世界の棚田

世界の棚田はモンスーン気候の東南アジア山岳地帯に多く見られ、なかでも世界遺産に登録されているフィリピン・ルソン島北部のコルディリェーラ自治地域の棚田群、中国雲南省南部紅河ハニ族イ族自治区の大規模な棚田群、観光地として名高いバリ島のウブド近郊の棚田、という3地域は特に有名である。

確認されているところでは、イランのカスピ海沿い、アフリカ・マダガスカル島にも棚田があると言われている。



世界の棚田分布

1.3 世界農業遺産とは

世界農業遺産（GIAHS）は国際連合食糧農業機関（FAO）が認定するもので、「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業」と、それに密接に関わって育まれた「文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）」を対象としている。

2005年に創設されて2010年から本格化、2022年4月現在では世界で22ヶ国62地域、日本では11地域が認定されている。

棚田では、世界遺産のフィリピン・コルディリエーラと中国・雲南を認定しているがインドネシア・バリ島は外れている。

他に日本の能登の里山里海（白米千枚田を含む）と中国の南部山岳地域（主として広西チワン族自治区）、韓国の青山島のグドゥルジャン棚田灌漑管理システムが棚田として認定されている。

1.4 イフガオとハニ（哈尼）

今回とりあげるのはフィリピン ルソン島 コルディリエーラ自治地域のイフガオ州の棚田群と、中国 雲南省 紅河流域の紅河哈尼（ハニ）棚田群である。

世界遺産ではもう一つインドネシア バリ島 ウブド近郊の棚田が登録されているが、「棚田景観」よりも宗教的社会組織が評価の中核となっていると考えられるため、ここでは除外した。

2. フィリピン・コルディリエーラの棚田群

2.1 概要

1995年に登録されたフィリピン・コルディリエーラの棚田群は、フィリピンのルソン島北部イフガオ州の中央山岳地帯の主に東斜面に広がる棚田地帯。棚田の規模としては世界最大ともいわれている。コルディリエーラはスペイン語で山脈を意味し、標高1,000メートルを越える峰々が多数存在している。

イフガオ州は6州1特別市によって構成されるコルディリエーラ自治地域（CAR）のうちの1州であり、「イフガオ族」と総称される複数の少数民族が居住する。



イフガオ の位置

この地域の主たる生業は約2000年前から続く棚田での稲作であり、等高線に沿って急傾斜地に広がる棚田は「天国への階段 (Stairways to Heaven)」とも称され、伝統的な農事暦にしたがって栽培が行われてきた。中心地域のバナウエの谷を覆う棚田の泥壁や石垣をつなぎ合わせると長さ2万kmにも達するとされる。また、バダットやボントックにも大規模な棚田が広がっている。

この棚田群は、人類が地形的な制約を克服して開発、人間の生命活動を実証した見事な傑作と評価されて世界遺産に登録されたものである。

しかしながら、登録後には村民の村離れによる後継者不足などから放棄される棚田が増加し、水利システムの停止と斜面崩壊、大ミズによる被害なども加わって、荒地化や畑への転作による景観の悪化、管理計画の不備などを理由に2001年、危機遺産リストに登録されてしまった。

その後、国内と日本を含む国外からの支援を受けて、地域住民の主体性を生かした伝統技法による棚田保全が精力的に図られ、2012年に危機遺産リストからの削除を果たしている。

2.2 棚田の景観







2.3 イフガオという地域

この地域の先住民族はイフガオ族と総称されているが、個別にはバナウエ族、ブンラン族、マヤヤオ族、ハリパン族、ハパオ族、キアングアン族などと認定されている。イフガオ族は森林や棚田の管理者であると共に、地域の生態系や自然資源について高度な知識・経験を持っている。彼らはイフガオ州の南部、中央部、西部の海拔800メートルから1500メートルの高地に暮らしている。

一方、イフガオの棚田はフィリピンを象徴する景観のひとつでもあり、同国の紙幣にも印刷されていて、これを目当てに国内外から多くの観光客が当地を訪れ、棚田は単なる食料生産の場のみならず地域の重要な観光資源ともなっている。

しかしながら、世界遺産指定地の棚田を維持する先住民の集落は、国道から離れた山奥の高地に位置しているため、観光産業による経済成長の恩恵には浴していない。

2.4 協力と交流

2014年1月、JICA（国際協力機構）は金沢大学、イフガオ州立大学、フィリピン大学とイフガオ州政府も加わるプログラム The Ifugao Satoyama Meister Training Program (ISMTP) を立ち上げるプロジェクトを開始した。

これは、世界農業遺産に認定された石川県能登地域で金沢大学が実施した若手人材育成プログラム「里山マイスター」のノウハウをイフガオ地域に導入しようとするものである。

2017年には、イフガオ棚田群と能登の里山里海とを結んで ISMTP のフェーズ2が開始された。

2019年、イフガオ州立大学は「里山イニシアチブ (IPSI) 」の国際パートナーシップの新しいメンバーに迎えられた。研究プロジェクトとしてのイフガオ棚田アセスメント (IRTA) も、里山イニシアチブの国際パートナーシップである里山開発メカニズム (SDM) によって承認された。さらに、先住民研究のための国際イノベーションセンターとイフガオヘリテージリソースセンターが、台湾国立政治大学と提携して、IFSUGIAHSセンターの下にイフガオ州立大学に設立された。

2020年、バナウエのBatad と Bangaan の棚田、 Hungduan 棚田、キアンガンの Nagacadan 棚田、マヨヤオの Central Mayoyao 棚田の5箇所のアセスメントが組織された。

2021年、ISMTP フェーズ3をイフガオ州立大で開始。

2022年、第1回イフガオ棚田評価国際サミット2022が、里山イニシアチブのための国際パートナーシップの支援のもとイフガオ州立大学で開催された。

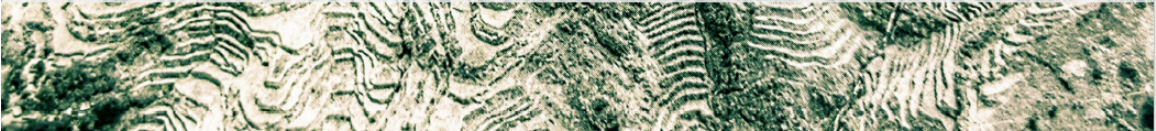


Summit Program Guide

**1st IFUGAO RICE TERRACES
ASSESSMENT
International Summit 2022**



SATOYAMA
INITIATIVE





UNITED NATIONS
UNIVERSITY
UNU-IAS

Globally Important
**AGRICULTURAL
HERITAGE**
Systems



UCLA Center for Southeast Asian Studies

3. 紅河哈尼棚田群の文化的景観

3.1 概要

2013年に登録された紅河哈尼棚田群は中国雲南省南部にあり、その面積は16,603haに達する。また周辺には29,501.01 haの緩衝地域（バッファゾーン）が設定されている。

特徴である壮大な棚田群はアイラオ山の斜面から紅河のほとりまで続き、森林に覆われた山頂から棚田に水を運ぶための複雑な水路システムが、ハニ族を中心とする住民の手によって過去1300年にわたって開発されてきている。



紅河ハニ族イ族自治州の位置

この地域は雲南省南部の紅河ハニ族イ族自治州に属し、住民はイ族、ハニ族を中心とするチベット系の少数民族が8割以上を占めている。

住民は山頂の森と棚田の間に位置する82の村で伝統的な茅葺きの「きのこ」型の家に住むとされているが、実は2000年以降に地方政府が補助金を付けてこの伝統住居への回帰・改築を進めてきたもので、多分に観光を意識した住居となっている。

また、自治州全体ではイ族の方が人口が多く、彼らも棚田を造っているのでハニ族が前面に出るのは奇妙とも言えるが、様々な事情があったようである。

彼らはまた、地域の主要作物である赤米の生産に水牛、牛、アヒルの飼育、魚（コイ）、ウナギの養殖を組み合わせた統合的な農業システムを作ってきた。

3.2 棚田の景観













3.3 元陽県という地域

中心となるのは元陽（Yuanyang）県（以下元陽県とする）で、観光受け入れ態勢も整備されている。

元陽県は中国雲南省紅河ハニ族イ族自治州に属し、雲南省南部、哀牢山脈の東部また南縁に位置している。元陽県は総面積が約2189.88平方キロメートルで、低平地は極めて限られており、8割以上が勾配25度以上の高くて険しい山々である。県内では標高144mの紅河沿いから2939.6mの白岩子山まで、標高差は2795mに達する。

標高差が大きいいため、気候の垂直変化も著しく、熱帯、亜熱帯と温帯三種類の気候帯になっている。このため「一山分四季、隔里不同天」（一つの山で高さにより四季の気候帯を持ち、一里距離が離れているだけで異なる天気になる）と言われるような非常に独特な気候を有している。

2006 年末のデータによると、棚田の面積が約1.27 万ha（総耕地面積の約53%に相当）、標高170 m から標高1980 m の広い範囲に分布している。

2006年時点において、元陽県の総人口は約380,609人、主にハニ（哈尼）族、イ（彝）族、タイ（■=人偏に泰）族、ミャオ（苗）族、ヤオ（瑶）族、チワン（壮）族及び漢族など7つの民族の人々が居住しており、少数民族の人口が総人口の88%を占めている。

元陽県で人口数が最も多いのはハニ族で、約53.04%を占めており、次いでイ族が23.97%となっていて、総人口の約95%が農業を営んでいる。

3.4 観光開発と住民

孫 潔は2012年発表の研究論文で、元陽県の箐口村という小村を事例として挙げながら、中国では地方の観光開発の主体が観光業界や外来資本ではなく地元の政府と住人であり、地域が自律性をもつことが特徴であると指摘している。以下、孫の論文から要約して紹介する。

箒口村は標高1,650m の高所にあつて面積は5 ha 、178世帯865人が居住（2007年）、村民の98%がハニ（哈尼）族の村である。

2000年から2004年にかけて、元陽県政府は約200万元を投資し、箒口村を「ハニ民俗文化生態村」と改名、村内の民家を自身の新旧を問わず屋根を稲藁で覆いキノコ型に改築させた。

この蘑菇房（マッシュルーム・ハウス！）への改築・維持のために、敷地面積1平方メートルあたり45元の補償金を村民に支払う政策も講じた。

蘑菇房は八二族の伝統的な住宅で、屋根を稲藁で丸く葺くため外観がキノコに似ている。居住性は良いが火災に弱く、稲の品種の変化で長い藁が減ったこと、都会風的生活への憧れなどから減り続けていた。2000年当時、元陽県の中で現存する蘑菇房の比率が最も高かったのが箐口村で改築は数軒で済むことが、この村が選ばれた要因の一つだろうと孫は指摘している。

元陽県政府はさらに村の中心部に「八二民俗生態陳列館」を建て、野外にも伝統を感じさせるものを配置、幹線道路から村に至るおよそ2kmの道路も石畳で舗装した。



2001年10月 箒口村は民俗村として開園、入園料は10元。

2002年2月 元陽県観光局が村に「管理委員会」(以下"管委會")
を設置、副局長を村に駐在させる。

2003年9月、ハニ族の踊りや歌を実演する「文芸隊」を管委會
の下に組織。対象は観光客や視察団。

2007年時点で文芸隊は合計20名（うち8名が女性）、箒口村
の一般村民で構成。

文芸隊は、主に視察団への接待及び観光客向け（観光シーズンのみ）に一回30分程度の芸能を披露。それ以外は毎日一時間半の練習が課され、陳列館と広場の掃除を担当。

民族芸能の殆どは元来宗教的な意味を持ち、儀礼、葬式などで演じられていたものだが、政府は単なる観光資源という認識で演目を再構築するようになった。結果、かつて男性しか踊らなかった舞踊が女性によって披露されたり、葬式でしか踊らなかった踊りを観光客と一緒に楽しく踊る状況となってきた。

孫の研究では、当初文芸隊には歌や舞踊のできる者、共通語の話せる者、容姿の良い者など、若者を集めたが、彼らは都会に出てしまい、最終的には「主婦パート」ばかりとなった。

また、入村料収入は県政府が7割とって村には3割しか来ず、村民への分配も極くわずかである。

結果的に「観光（だけ）で生活」している者は村民900人弱の内極く僅かなのだが、「外」との交流ができるようになったことで村民の満足度は高いという結果だった。

4. おわりに

4.1 棚田という文化遺産

日本では「遺産」という言葉は“遺”の印象が強く、文化遺産も学術的価値と観光資源という視点でしか見ない傾向が強い。

しかし、棚田をはじめとする「農業遺産」の多くは現在も機能・活動を続けていて、そこで日々の生産・生活を続けている人々が居る、という点で大きく異なっている。

今回とりあげたイフガオ州と紅河ハニ族イ族自治州の棚田も決して「遺跡」ではなく、今もそこで多くの人々が生活している。

「棚田」に注目すると、そこには現在の人類が直面する殆ど全ての「課題」が関わってきていることに気づかされる。

イフガオ州の棚田が荒れ果てて一時危機遺産となったのは、情報化・グローバル化によって若者の多くが大都会からさらに海外に出稼ぎに行ってしまったからであった。

また、紅河ハニ族イ族自治州の箒口村でも都市部への出稼ぎが常態化しているために、県政府主導で観光開発を進めても村自体の内発的な発展には繋がっていない。

さらに、どちらも棚田が自然条件に大きく依存することから大規模気候変動を大きな危機と認識している。

さらに、イフガオ州も紅河ハニ族イ族自治州も「少数民族」が住む地域であるということがある。

すなわち、棚田という農業景観だけでなく、民俗文化的にも国民の多数を占める民族とは異なる点があることで、雲南の元陽県では「棚田」が世界遺産に指定されたのに県政府はハニ族の「民俗文化村」創設に走る、といったことが起きている。

また、イフガオ州は第二次大戦末期追い詰められた日本軍が最後に逃げ込んだ地区であり、地元住民にも大きな被害を与えたことを、日本人は忘れてはならないと思う。

4.2 未来への希望

イフガオの棚田保全をきっかけとして、伝統農業と自然保護・住民福祉の向上を目指す広範囲の国際協力が始まっている。

「遺産」の認定・登録をめぐるには競合している UNESCO と FAO がイフガオでは完全な協力体制をとり、日本からも国連大学（日本に本部）と金沢大学が参加している。

この活動を中心となって進めている SATOYAMA イニシアティブは、石川県能登の白米千枚田の保全・維持活動から生まれた「里山里海」の思想から発展したもので、そこで大きな役割を果たしたのが金沢大学であった。

SATOYAMAイニシアティブとは

SATOYAMAイニシアティブは、生物多様性の保全と人間の福利向上のために、里山のような人間が周囲の自然と寄り添いながら農林漁業などを通じて形成されてきた二次的自然地域の持続可能な維持・再構築を通じて「自然共生社会の実現」を目指す国際的な取組です。

日本では里山や里海と呼ばれるこれらの地域では、人間と周囲の自然が調和し、その相互作用により生物多様性が維持されると共に、人々の暮らしや福利に必要なモノやサービスが持続的に供給されています。

このような地域を世界で認識できるように、「社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ (SEPLS)」と呼んでいます。本イニシアティブは日本国環境省と国連大学サステイナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) が共同で提唱しました。

長期目標：自然共生社会

3つの行動指針：

1. 多様な生態系のサービスと価値の確保のための知恵の結集
2. 伝統的知識と近代科学の融合
3. 新たな共同管理のあり方の探求

環境容量・
自然復元力の
範囲内での
利用

地域の
レジリエンス
の向上

自然資源の
循環利用

地域の伝統・
文化の価値と
重要性の
認識

多様な主体の
参加と協働

社会・経済
への貢献

6つの視点